

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 30 年 12 月 25 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	井上 漱太

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)	
マレーシア、コタキナバル	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
CET-Bio マレーシア国際ワークショップ	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)	
平成 30 年 10 月 15 日 ~ 平成 30 年 10 月 21 日 (7 日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
Dr. Henry Bernard, University Malaysia Sabah	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
<p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>本出張は WRC 幸島教授が主催する CET-Bio 国際ワークショップへの参加・発表とその後開催されたエクスカーションへの参加を目的としたものであった。国際ワークショップはボルネオ島コタキナバルにあるサバ大学で開催された。マレーシアの研究者のみならず、インド、インドネシア、ブラジルの研究者が集まった。</p> <p>ワークショップでは、ボルネオ島ということで、オランウータンに関する発表やコンフリクトに関する発表が多くあった。これらの問題は、実際に数多くの希少な野生動物が生息する東南アジアとそこに暮らす人々の間で恒常的に生じている問題であり、近年の経済的成長によって表面化してきた問題でもある。世界中で生じている問題であるがゆえに、ケースはさまざまであるが、しかし、本質的なゴールとしては野生動物と人間の生活の共存であろう。そのため、本ワークショップのように各国の参加者が色々な視点から意見と情報を交換することには非常に価値があると感じている。そこに私たちのような学生が参加することで、問題解決へ向けた情報が未来へと共有されていくと思う。私はポスター発表をおこなった。日本から京都大学以外からも何人か参加者がいて、ネットワークを築くことができた。日本には、海外のフィールドで動物研究をおこなっている学生は決して多くないだろう。学問的興味の違いによって出会うことができない学生と出会えたことは非常に有意義であった。</p> <p>ワークショップに引き続いて開催されたエクスカーションではキナバタン川流域のスカウを訪れた。夕方と夜、2回のリバークルーズと植林体験をおこなった。リバークルーズでは様々な動物を見ることができた。カニクイザル、テングザル、スローロリス、フクロウ、カワセミなどを見ることができた。植林体験では、キナバタン川流域の土地を購入し、野生動物の保全へ向けた植林をおこなっているという。しかも、働いているのは全員女性で地域の保全と経済活動を両方支援する非常に良い手段だと感じた。実際に植林を手伝ってみると、気温と湿度も高く予想以上の重労働であった。</p> <p>今回のワークショップとエクスカーションを通して、貴重な経験ができたことにまず感謝したい。通常の研究活動だけでは決して得られない経験、すなわち、自分の調査地以外を見て歩く経験は広い視野でものを考えるときにきっと役に立つだろう。さらに、現地のワークショップで得られた人とのネットワークも大事にしながら、研究活動を進めていきたい。</p>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

6. その他 (特記事項など)

まず、幸島教授、そして現地で活動をサポートしていただいた金森博士、久世博士、中林博士、田島博士に感謝申し上げます。さらに、経費を支援してくださったPWSに感謝申し上げます。